

中高生の月経困難症に対する 漢方薬の使い方

たけもとレディースクリニック(神奈川県) 竹本 由美

中高生の月経困難症に対して低用量エストロゲン・プロゲスチン療法を行う機会は増加しており、多くの症例でその症状は改善する。しかし一部の症例では十分な治療効果を得られなかったり、マイナートラブルを発生したりする。そういった場合の漢方薬の有効な使い方を、多くの中高生を治療しているレディースクリニックの視点で紹介する。

Keywords 月経困難症、低用量エストロゲン・プロゲスチン療法、思春期

緒言

生殖可能年齢の女性の約80%に月経困難症があり、約30%に医学的介入が必要と言われている¹⁾。当院は女性医師が院長をしているレディースクリニックということもあり、若年女性が月経困難症を主訴として来院することが多い。その症状は、月経時の下腹痛・腰痛・腹部膨満感・嘔気・頭痛・食思不振、月経前の下腹痛・腰痛・イライラなど多岐にわたり、その重症度も様々である。多くの症例は低用量エストロゲン・プロゲスチン療法(以下、LEP)により症状の改善をみるが、一部の症例では十分な治療効果を得ることができない。治療効果を得られたとしても、LEPに伴うマイナートラブルを生じる症例にもしばしば遭遇する。そういった場合、漢方薬がその効力を大いに発揮する。

本稿では、当院で月経困難症に対して漢方薬を処方した中高生を数例提示し、当院の漢方薬使用の方針や工夫を紹介する。

症例1 14歳、BMI : 18.0

月経様の性器出血が1ヵ月持続するため受診。痛みは伴っておらず、出血量は増加傾向にあった。症状出現前より部活動が忙しく、ストレスを抱えていたとのこと。経腹超音波断層法にて子宮・付属器に器質的異常はなく、子宮内膜は菲薄化していた。卵巣機能不全による無排卵周期と診断し、当帰芍薬散4g/日(分2)の内服を開始した。血液検査にてホルモン値に異常はなく、1週間後には不正性器出血は消失した。その後も当帰芍薬散の内服を継続し、

3ヵ月後には月経周期は月に1回に復し、不正性器出血は再燃しなかった。6ヵ月後も月経周期は安定しており、今後も内服継続を予定している。

症例2 16歳、BMI : 21.0

月経痛・過多月経・月経前1週間の倦怠感を主訴に受診した。経腹超音波断層法にて子宮・付属器に異常所見はなかった。機能性月経困難症と診断し、月経1週間前から月経中にかけて桂枝茯苓丸6g/日(分2)の内服を開始した。同時に月経時のトラネキサム酸250mg 2錠/日(分2)の内服を過多月経に対して開始した。1ヵ月後の月経では、過多月経は軽快し、月経痛も軽度改善した。3ヵ月後の月経では、過多月経は消失し、月経痛は自制内となり、月経前の倦怠感は消失した。その後も継続して月経前後の桂枝茯苓丸の内服、月経時のトラネキサム酸の内服を継続している。

症例3 18歳、BMI : 16.4

14歳時より起立性調節障害のため柴胡桂枝湯を内服している。月経時の痛みと、月経前の気分の落ち込み・頭痛・嘔気を主訴として当院を受診した。経腹超音波断層法にて子宮・付属器に異常所見はなく、機能性月経困難症の診断でLEPを開始した。開始1ヵ月後、月経前の頭痛と嘔気が消失し、開始6ヵ月後には気分の落ち込みも消失した。しかし月経痛は持続していたため、LEP休薬期間のみの桂枝茯苓丸6g/日(分2)の内服を開始した。これにより月経痛もほぼ消失し、現在も同様の治療を継続している。

今回報告した3症例において、薬剤に起因すると考えられる副作用はみられなかった。

考 察

日本産科婦人科学会と日本女性医学学会より発刊されているOC・LEPガイドライン2020年度版には、初経発来後であれば骨成長・骨密度への影響を考慮しながらLEPを開始できると記載されている²⁾。しかし骨成長や骨密度に関する解説にはあいまいな表現が多く、中高生に対するLEPの開始をためらうことは多い。さらに中高生は母親同伴で来院することが多く、母親がLEPの内服に拒否感を抱く場合も少なくない。これは2013～2014年にLEP内服中の肺血栓塞栓症による死亡例がセンセーショナルに報道されたことや、月経困難症に対するLEPが保険適応となったことを知らない(ピルを避妊目的の薬と認識している)ことなどが原因と思われる。その結果、LEP開始がQOL向上に大きく寄与できるであろう中高生に、LEPがなかなか行き渡らないというジレンマが発生する。

そういった場合、当院では以下の点に留意しながら、まずは漢方薬による月経困難症の治療を開始している。体力が弱めでめまいや貧血症状を伴う月経困難症には当帰芍薬散を、イライラや倦怠感、月経前のメンタルの不調を強く伴う月経困難症には加味逍遙散を主として最初に投与している。症例1は前者に当たり、部活動が本人の想定以上に負担となっていた可能性を考慮して当帰芍薬散を選択した。月経不順のみでなく、その他の血虚に伴う諸症状も改善したことが、長期内服につながったと考えている。

逆に比較的体力があり、のぼせを伴うような月経困難症に対しては、桂枝茯苓丸や桃核承気湯を選択している。症例2では瘀血を改善する必要があると判断し、桂枝茯苓丸を選択した。その他に月経痛が激しく胃腸が弱い方には当帰建中湯、血虚の症状があり特に唇が乾く方には温経湯といった具合に、適宜その他の漢方薬も使用している。

LEPで月経困難症が改善したとしても、一部の症例には症状の一部が残存したり、LEPに伴うマイナートラブルが発生したりする。症状が残存する場合、その症状に適した漢方薬を選択して処方することになる。症例3ではLEPにより月経前の頭痛と嘔気、気分の落ち込みは改善したもの

の、月経痛のみが残存した。そこで桂枝茯苓丸を併用することで月経痛を抑えることができ、QOLの向上に寄与することができた。LEPに伴うマイナートラブルとして、不正性器出血、むくみ、悪心、乳房の張り、イライラなどがよく見受けられる。LEPを継続することで改善する症状もあるが、日常生活を妨げる程度のトラブルである場合、不正性器出血に対しては桂枝茯苓丸や芎歸膠艾湯を器質的異常の鑑別後に処方している。むくみに対しては五苓散が有効であることが多く、悪心に関しては半夏瀉心湯や六君子湯などを処方している。また、乳房の張りには当帰芍薬散、イライラには抑肝散などが奏効する場合が多い。

その他の工夫として、症例2や症例3のように、月経周期に応じた内服期間の調整も行っている。毎日内服することに苦痛を覚える中高生にとって、効果を実感できるタイミングのみに内服することはコンプライアンスの上昇につながる。同じように粉薬を苦手とする中高生には、錠剤も有する桂枝茯苓丸・桃核承気湯・加味帰脾湯などを選択する場合もある。母親も月経に伴う症状を抱えている場合、母親も同時に治療することで効果を実感させることも、中高生をよく診ているわれわれのようなクリニックでは有効な手段となっている。

以上のように、LEPを使用できない症例や、使用できたとしても補完的な治療が必要な場合、漢方薬は大きな効力を発揮している。患者の症状を漢方的視点で分析し、様々な工夫をしながら適切な治療を行うことで、中高生の月経困難症はさらに良好にコントロールできると考えている。

【参考文献】

- 1) 本邦における子宮内膜症の実態に関する研究 厚生省心身障害研究: リプロダクティブヘルスからみた子宮内膜症の実態と対策に関する研究, 武谷雄二ら, 日本産科婦人科学会雑誌 51巻, 1999
- 2) OC・LEPガイドライン2020年度版, 日本産科婦人科学会・日本女性医学学会編集・監修, 2021